

はじめに

考古学を専門とする筆者は、これまで国内外の多くの遺跡と関わりを持ってきた。近年、学問的にも認識が深まってきたのは、遺跡というものが考古学的な研究対象であると同時に、さまざまな形で、多くの人に多様なメッセージを発信している事実である。考古学にとっては科学的な研究対象である遺跡や遺物が、一般市民や観光客には謎を呼び覚まし、また、地域活性化や観光の素材となったり、逆に利害の衝突を引き起こしたりする場合があるのである。本連載では、そうした遺跡や遺物が発するさまざまなメッセージを読み解き、また、それらが持つ多義的な性格や現代的な意味について、「遺跡からのメッセージ」を全体のテーマとして、個別テーマを取り上げて、過去と現在を行き来しながら、しばし思考を試みることにしたい。

遺跡の過去と現在 —茨城県大串貝塚—

そもそも遺跡とはいったい何なのだろうか。考古学的に見ると、遺跡とは、遺物が出土し、遺構が検出する場所、言い換えれば、過去の人間の活動や営みの痕跡が残る場所である。遺跡にさまざまな痕跡を残した、たとえば縄文人や弥生人は、はるか過去に現実に生きた人々であり、彼らが残した土器や石器は、遠い過去に当時の暮らしの場で実際に用いられた道具であった。やがて、その暮らしの場から人々がいなくなり、ムラにあった建物は朽ち果てて、家財や道具は持ち運ばれ、あるいはその場に取り残され、ついにその場所は、「遺跡」へと変化を遂げ、時間とともに、人々が暮らしていた時とは違った意味や価値を帯びてくることになる。遺跡とは明らかに過去に所属するものであり、遺跡の時制は過去形だと言ってよいが、今の現代人が遺跡を通して理解や解釈をしようとするその「過去」は、過去に所属するというよりは、むしろ現代に所属すると言った方がいいかもしれない。かつて、そのムラに暮らしていた人々は、自らを、「縄文人」や「弥生人」だなどは考えていなかったはずで、その意味では、「縄文人」も「弥生人」も過去には存在せず、むしろ、現代の所産であるというべきなのである。

近代において考古学が学問として発達をする以前においては、洋の東西を問わず、謎のモニュメントや奇妙な遺物が発見される不思議な場所は、異教徒や伝説や伝承と関連づけた理解がなされていた。たとえば、茨城県水戸市にある大串貝塚は、文献に記録された世界で最も古い貝塚として有名である。奈良時代に編纂された『常陸国風土記』那賀郡の条に、「平津の駅家の西十二里に岡有り。名を大櫛と曰ふ。上古、人有り。身極めて長高く、身は丘の上に居ながら、手は海浜の蟹をくじりぬ。その食へる貝、積もりて岡と成りき。時の人、大櫛の義を捕りて、今は大櫛の岡と謂ふ。その践みし後は、長さ四十余歩、広さ二十余歩、尿の穴の径は二十余歩ばかりなり」とあり、この大櫛の岡にあたるのが今の大串貝塚だと考えられるのである。

かつて巨人伝説と関連づけられた現在の大串貝塚は、水戸市域を東流して太平洋に注ぐ沼淵川の当時の岸辺、那珂台地の突端に位置し、周辺には、風土記に記されたとおり、律令制期の交通拠点「平津の駅馬」が存在し、鏡塚古墳や磯浜車塚などの古墳も分布していて、古来から水上交通の要所だったと推測される。近代になり、貝塚が学界に知られるようになったのは、モースが大森貝塚を発掘した1877年(明治10)から8年後

の1885年(明治18)の頃からであり、1936年(昭和11)、1943年(昭和18)、1950年(昭和25)と、断続的に行われた発掘調査で、縄文時代前期に形成された貝塚であることが確認され、石鏃・貝輪・貝刃・ヤス・釣針などの骨角器や貝類、スズキ・タイ・フグなどの魚類、イノシシ・シカなどの獣骨が検出され、当時の生活文化の様相が明らかになった。発掘調査では、ヤマトシジミ、マシジミ、ハマグリ、アサリ、カキ、アワビ、サザエなど、淡水産の貝と海産の貝が混在して出土し、入江状の地形に川が流入するような汽水域の環境に貝塚が形成されたことも明らかになった。

筆者は、昨年5月、茨城県に住まいする友人に案内されてこの貝塚を初めて訪ねることができたが、現在、遺跡は国史跡に指定され、遺跡の周辺は「大串貝塚ふれあい公園」として整備



写真 大串貝塚の「ダイダラボウ」像(筆者撮影)

され、高さ15mの白亜の巨人像「ダイダラボウ」が貝塚を見下ろすように、そびえ立っている。「ダイダラボウ」の内側には階段があり、展望台となった手のひらの場所まで上ると、貝塚の後ろの広々とした平野(かつては海岸線だった)の方向を見渡すことができる。遺跡公園内には、「ダイダラボウ」の足跡を風土記通りに象った池があり、巨人の大きさを見学者に印象づけている。一方、公園内の「貝層断面観覧施設」では、さまざまな種類の貝がおびただしく堆積した貝塚の様子を観察することができ、「縄文くらしの季節館」では、出土遺物を通して、「縄文人」の暮らしぶりを垣間見ることができる。このように、大串遺跡では、重層的に積み重なった「過去」が表現され、訪れる現代の人々に対して、静かに多様なメッセージを発している。そうした遺跡のメッセージはどのように読み解かれるべきなのだろうか。

現在と過去の「二つ一つ」

本連載でこれから取り上げることになるさまざまな遺跡は、大串貝塚の場合もそうであるように、ある一つの地域における過去の人々の生活や文化がパッケージされたものであり、同時に、外来の遺物などを通して、はるか遠方との交流や文化の伝播が存在したことなども窺い知ることができる。また遺跡は、過去の所産であると同時に、現在においても、今を生きる人々にさまざまな意味を発し、価値を与える現代的な側面も併せ持っている。すなわち、遺跡というものは、ローカル、グローバルという対立軸を橋渡す「二つ一つ」のみならず、「過去」と「現在」というもうひとつの「二つ一つ」を含み込んでいるのである。本連載では、遺跡の持つこうした「二つ一つ」の側面を念頭に置き、筆者自身のささやかな体験も踏まえながら、遺跡がつなぐローカルとグローバル、そして、過去と現在を学問的に橋渡す思考の試みを目指したい。